

有能感の4類型と返礼行動の関連

—仮想型に注目して—

澄川 采加¹ 稲垣 勉^{1,2}

¹鹿児島大学 ²教育テスト研究センター

本研究では、仮想的有能感と自尊感情を組み合わせ作成された有能感の4類型と、非援助時に生起する感情や返礼行動との関連について、仮想型に注目して検討した。176名の大学生・大学院生を対象にしたシナリオ実験の結果、返礼の量に関する類型間の相違は見られなかったものの、仮想型は他の類型よりも被援助時に「静的ネガティブ感情」を喚起しやすく、「食事を奢る」という返礼行動を行う傾向がみられた。

キーワード：仮想的有能感，自尊感情，返礼行動，有能感の4類型，被援助時の感情

1. 問題と目的

「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚（速水・木野・高木，2004，p.1）」と定義される仮想的有能感という概念がある。その測定には他者軽視傾向の程度を測る尺度（速水，2006）が用いられるが、他者軽視傾向が高い者は、いじめの被害経験のみならず加害経験も多い（松本・山本・速水，2009）など、対人コミュニケーションに困難をきたすことが多い。

ただし、本当に「仮想」的、すなわち根拠のない有能感と言えるかは自明ではない。自分に自信を持ち、それに基づいて他者を軽視している可能性も考えられる。そこで速水・小平（2006）は、この他者軽視傾向に自尊感情を組み合わせた4象限からなる「有能感の4類型」を提唱した。このうち自尊感情が低く他者軽視傾向が高い類型にある者は「仮想型」と呼ばれる。仮想型は自尊感情が低いことから、本来の仮想的有能感の定義である「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく…」という点に最も近似した類型になる（速水，2012）。この仮想型の特徴を持つ者は、日常生活において敵意感情や抑鬱感情を生じやすく、これらの感情の揺れ動きが大きい（小平・小塩・速水，2007）といった、他の類型と比してネガティブな特徴を持つという報告がある。

本研究では有能感の4類型を扱う研究に一資料を加えることを目指し、有能感の4類型と被援助時の感情、返礼行動との関連を検討する。他者との親密さを求める一方で強い対人不信があり、それが親密さに対する不快感や親密な関係の回避につながる愛着スタイルである「恐れ型」と、有能感の4類型の「仮想型」は共通する部分がある（島，2012）。また、仮想型および萎縮型は、被受容感と被拒絶感の両方が高い（箕浦・成田，2009）。以上のことから、仮想型の特徴を持つ者は、他者から援助を受けた際に、相手に受容されたと思いきや反面、拒絶されることへの不安から、その好意を心から信じるのが難しく、心苦しきのような感情が生起すると考えられる。本研究ではシナリオ実験を用いて、親友から援助された際に生じる感情や後続の返礼行動について、特に仮想型に注目して検討する。

2. 方法

2.1 参加者 18-41歳の大学生・大学院生 176名（男性 65名，女性 109名，不明 2名，平均年齢 20.86歳， $SD = 8.44$ ）を対象とした。

2.2 材料 パーソナリティの測度は、自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982）10項目4件法（1: あてはまらない—4: あてはまる）、他者軽視傾向尺度（速水, 2006）11項目5件法（1: 全く思わない—5: よく思う）を使用した。返礼行動の測度は、被援助時の援助者に対する感情（一言・新谷・松見(2008)を参考に作成）10項目6件法（1: 全くそう思わない—6: 非常にそう思う）、返礼の量（一言他, 2008）の単項目6件法（1: 報いない—6: 受けたもの以上）を使用し、返礼の種類は自由記述で回答を求めた。

2.3 手続き 質問紙形式でシナリオ実験を行った。シナリオは相川（1988）が作成したもののうち、心理的負債感の高くなりやすいものを選び、援助コスト高・低の2種類を使用した。質問紙はパーソナリティの測度、親友のイニシャルと性別、シナリオ、返礼行動の測度という順で構成し、その順に回答を求めた。また、以下の分析には親友のイニシャルを記入していなかった参加者（6名）はシナリオを十分に読み込めておらず、シナリオを自分に起こったことのように思えていなかったとみなし、以降の分析対象から除いた。なお、他にも心理尺度を実施しているが、本研究の目的とは異なるため、報告は割愛する¹。

3. 結果

3.1 感情尺度の因子構造 感情尺度は多くの項目に天井効果や床効果がみられたため、これらを除き、残った項目に対し主成分分析を実施した。その結果、「申し訳ない」「恥ずかしい」「驚き」の3項目からなる1因子構造となった。この因子を「静的ネガティブ感情（ $\alpha = .57$ ）」と命名して合算平均得点を求めた。

3.2 有能感の4類型と感情の関係 自尊感情尺度得点（ $M = 2.58, SD = 0.48, \alpha = .81$ ）と他者軽視傾向尺度得点（ $M = 2.72, SD = 0.61, \alpha = .81$ ）の中央値（順に 2.55, 2.73）を基準に、参加者を有能感の4類型（全能型、自尊型、仮想型、萎縮型）に割り当てた（順に $n = 40, 42, 39, 39$ ）。その後、被援助時の援助者に対する感情と返礼の量をそれぞれ従属変数、有能感の4類型と援助コストの高低を独立変数とした2要因参加者間分散分析を行った。その結果、静的ネガティブ感情において有能感の4類型の主効果が見られた（ $F(3, 152) = 3.04, p < .05, \eta_p^2 = .06$ ）。TukeyのHSD法で多重比較したところ、仮想型において、静的ネガティブ感情が他の類型より有意に高い傾向が見られた（図1）。返礼の量は援助コストの主効果のみ有意であり（ $F(1, 151) = 8.07, p < .05, \eta_p^2 = .05$ ）、コストが高い方が返礼の量が多かった。

3.3 有能感の4類型と返礼の種類の関係 返礼の種類について、自由記述で得た回答を「感謝の言葉、安価な食べ物、高価な食べ物、安価な物、高価な物、食事を奢る、その後の行動、その他」の8カテゴリーに分類し、有能感の4類型と「その他」のカテゴリー以外の7つのカテゴリーで χ^2 検定を行った。その結果、「食事を奢る」のカテゴリーと有能感の4類型の間に有意傾向の連関が示された（ $\chi^2(3) = 7.42, p = .06$ ）。残差分析の結果を表1に示した。他のカテゴリーに関しては有意な連関は認められなかった（ $\chi^2s \leq 4.54$ ）。

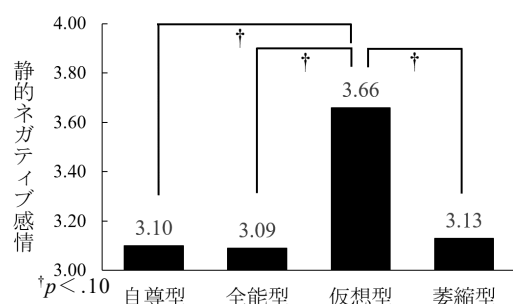


図1 有能感の4類型と静的ネガティブ感情

表1 「食事を奢る」と有能感の4類型の連関

	自尊型	全能型	仮想型	萎縮型
食事を奢らない	35	32	28*	37*
食事を奢る	7	8	11*	2*

* $p < .05$

¹ 本論文の調査は、上拾石・稲垣・澄川（2019）で用いている複数の心理尺度と同時に、1つの調査質問紙において実施した。

4. 考察

本研究では、仮想型は被援助時に、他の類型よりも静的ネガティブ感情が喚起しやすい傾向にあることや、「食事を奢る」返礼行動を行うことが明らかになった。特に、静的ネガティブ感情は「申し訳ない、恥ずかしい、驚き」といった、心苦しさに似た感情で構成されており、仮想型がこうした感情を喚起させやすかった点は、当初の予想と一致した結果である。こうした結果は、仮想型が有している「満たされない感覚（速水他, 2004）」が仮想型のネガティブ感情を喚起させ、その感覚を埋めるために他者を引き合いに出して満足感を得ようとしていると解釈できる。一方で、返礼の量の違いは援助コストの影響が大きいことが示唆され、返礼の量における仮想型独自の特徴は見られなかった。

本研究の課題として、感謝感情を含むポジティブ感情についても天井効果のため分析から除外せざるを得なかった点や、返礼行動が促進されやすいシナリオのみを選択した点が挙げられる。それらによって、誰でも感謝感情を喚起しやすく、援助者コストの高低の違いによる差はあるものの、誰でも返礼行動を多く行うといった天井効果のような結果となり、個人のパーソナリティの影響が観察されにくかった可能性がある。今後は感情語やシナリオについて見直し、検討を行う必要がある。

また、仮想的有能感の測定には **Implicit Association Test** など質問紙によらない方法も提案されている（藤井・上淵, 2011）。今後、こうした測度の使用も一考に値すると思われる。

5. 参考文献

- 相川 充（1988） 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, 58:366-372
- 藤井 勉・上淵 寿（2011） 他者軽視傾向を測定する IAT の作成 東京学芸大学紀要総合教育学系 I, 62:287-291
- 速水 敏彦（2006） 他人を見下す若者たち 講談社
- 速水 敏彦（2012） 仮想的有能感の心理学——他人を見下す若者を検証する—— 北大路書房
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子（2004） 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, 51:1-8
- 速水 敏彦・小平 英志（2006） 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, 14:171-180
- 一言 英文・新谷 優・松見 淳子（2008） 自己の利益と他者のコスト——心理的負債の日米間比較研究—— 感情心理学研究, 16:3-24
- 上拾石 直人・稲垣 勉・澄川 采加（2019） 自己卑下呈示行動尺度作成の試み 教育テスト研究センター年報, 4:25-31
- 小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦（2007） 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験——抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して—— パーソナリティ研究, 15:217-227
- 松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦（2009） 高校生における仮想的有能感といじめの関連 教育心理学研究, 57:432-441
- 箕浦 有希久・成田 健一（2009） 所属欲求は自尊心と他者軽視傾向の関係を媒介するか？ 日本心理学会第74回大会発表論文集, 51
- 島 義弘（2012） アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 21:176-182
- 山本 真理子・松井 豊・山城 由紀子（1982） 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30:64-68

